東京小諸会々報
（題字・初代会長　小山邦太郎先生）

第35号
発行日　平成23年11月19日
編集・発行　東京小諸会

〒184-0014
東京都小金井市貫井南町1-4-14
小山洋之介気付
東京小諸会実行委員会

〈東京小諸会信条〉　本会は、東京都及びその周辺に在住する小諸市出身者とその関係者をもって組織し、会員相互の親睦を厚くし、その向上と郷土の発展並びに社会文化に貢献する。

平成二十三年度 東京小諸会総会・懇親会を迎えて

東京小諸会　会長　小山　洋之介

会員の皆様、ご多用のなか東京小諸会総会・懇親会にご参加くださり誠に有難うございます。

今年も故郷小諸市からの芹澤勤市長様はじめ、山岸喜昭長野県議会議員様、別府福雄市議会議長様、香坂勝商工会議所会頭様、大西崇弘観光協会長様並びにご関係の皆様方大勢の方々にご参会頂き厚く御礼申し上げます。

さて、お陰様で今回は四十九回目の総会・懇親会を迎えることが出来ました。申しあげるまでもありませんが、本年は三月三十一日の東日本大震災、九月初めには豪雨を伴った十二号台風や十五号台風など、大きな自然災害に加え、原発事故による目に見えない広範な被害により日本の国全体が大きな不安に見舞われました。お気の毒なことに被害に遭われた方々には心からお見舞い申し上げます。また同時に、生まれ育った故郷を離れなければならない方々が大勢居られ、心の寄り処でもある故郷の大切さを改めて再認識させられました。

ところで、二百六十九年前に小諸も洪水に遭ったことをご存知の方はどの位居られるでしょうか。「戊の満水」と呼ばれる洪水は、寛保二年（一七四二年）の八月末から九月初めにかけて、近畿・中部・関東と広域に大風雨を伴った台風が襲い、諸河川は氾濫し、利根川・荒川・千曲川などは大洪水となったという。その時小諸では、浅間山麓から流下する中沢川・松井川に土石流が発生し、鉄砲水となって小諸の町を直撃、死者五百八十四人、流家三百七十三戸の大被害と記録されています。（詳細は信濃毎日新聞社出版局編『戊の満水』を参照）しかし、その後大きな災害は無く、先輩方の努力により、幸いに今日の小諸の街があります。

これからの小諸　今年も八月二十二日に開催されました、六十九回目の藤村忌に参加しました。今年は生憎雨模様ではありましたが、私は、毎年懐古園内で行われる藤村忌に出席するたびに、つくづく思いますのは、我が故郷小諸は、全国有数の自然観光都市として誇れるのではないかと再確認しています。

私は、会長を仰せつかって以来、毎年この欄で小諸市の発展に役立てばと、細やかな提案を幾つかして来ました。今回の提案は、三ッつのK（観光・健康・介護）を提唱しようと思います。

一つ目の観光については、既に様々な活動をされておられますので改めて

来年の東京小諸会総会・懇親会は

十一月十日（土）如水会館二階スターホールで

来年の東京小諸会総会・懇親会は、**十一月十日(土)十二時から、今年と同様、東京都千代田区一ツ橋二―一―一の如水会館二階スターホールで**開催することに決定いたしました。どうぞ今から予定にお入れになって、お誘い合わせ、多数ご参加下さいますようお願い申し上げます。

平成二十三年十一月十九日　東京小諸会

総会・懇親会次第

一、会長挨拶
一、物故者への黙祷
一、議事
　①役員承認
　②会計報告
　③会計監査報告
一、祝辞・来賓紹介
一、余興　ソプラノ独唱
一、懇親会
　①県歌「信濃の国」斉唱
　②鏡開き
　③乾杯
　④開宴・歓談・福引
一、中締め
一、閉会の辞

平成22年度決算報告書

自平成22年1月1日　至平成22年12月31日　（単位　円）

収入の部

科目	金額
前年度繰越金	303,909
会費収入	566,000
広告収入	400,000
御祝儀	334,000
雑収入	67
計	1,603,976

支出の部

科目	金額
総会関係費	881,887
通信費・事務用品	67,095
印刷費	129,150
会費・会議費	137,645
雑費	1,575
次年繰越額	386,624
計	1,603,976

上記の通り平成22年度決算を報告します。平成23年10月24日
常務理事（会計）　岩崎忠男
以上の報告を監査したところ正確であると認めます。
監事　中村美子
　　鈴木裕子

申しあげませんが、「健康体力づくり」と「温泉付き介護施設の誘致」については、小諸にとって時代に即した最適な施策ではないかと考えます。小諸市の総合計画の中に入れて頂いてはどうかと提案するものです。

二つ目の「健康体力づくり」ですが、小諸は、標高600mの千曲川から、浅間・高峰という標高約2500mまでの高低差のある独特の地形にあり、一見すると坂道だらけの住み難い街の様に思われがちですが、実は高低差に恵まれ、足腰を鍛えたり、心肺機能を高めたりするのに絶好の地形であるわけです。正に発想の転換で、既に、この地形を生かして標高2千メートル程の高峰高原を中心に高地トレーニングエリアの整備を構想している計画が、周辺市町村で検討されていると聞きます。是非とも地の利を生かして、スポーツを含めた広い「健康体力づくり」に生かして頂きたい。

三つ目は「温泉付き介護施設の誘致」です。老後の生活を、空気のきれいな田舎で過ごしたい、の傾向は介護施設の立地条件にもみられています。すでに小諸周辺には介護特別養護老人ホームが出来ていますが、最近は温泉付きの施設が注目され始めており、小諸ならではの温泉の効用を取り入れた施設の誘致を図ってはどうかと提案するものです。

実は次の様な実例があります。介護施設とは直接関係は有りませんが、定年退職後は都会暮らしから田舎暮らしを考える人が多くなったと言われるようになって久しいですが、先日、テレビ・新聞で老後の田舎暮らしの移転先に小諸を選び、快適な暮らしを始めたご夫婦が大きく紹介されていました。そのご夫婦が小諸を選定された決め手は、温泉が近くにあること・空気が綺麗なこと・医療面で安心感があることでした。老後の生活には温泉が大きな魅力のある条件と云えそうです。

既に小諸市では、芹澤勤市長陣頭指揮のもと、旧北国街道の街並み整備などをはじめ、街づくり計画が進められています。また行きたくなる、人に薦めたくなる魅力ある街づくりの為に、市当局をはじめ関係各位と力を合せて努力したいものです。

今年も総会・懇親会の開催にあたり、小諸市、信州味噌㈱、㈱三ツ和小諸そば事業部、常盤館、㈱高嶺商会、㈱香坂建設、三和シャッター工業㈱、コミー㈱、大塚酒造㈱、能美防災㈱、キッコーマン㈱、サッポロビール㈱、マンズワイン㈱、㈲エスポワール、深野かよこ様並びに本会役員有志の方々にご協賛を頂きました。記して厚く御礼申し上げます。

東京小諸会 平成二十三年度総会・懇親会にあたり

小諸市長　芹澤　勤

東京小諸会平成23年度総会・懇親会が、ご来賓の皆様をはじめ大勢の会員の皆様のご出席のもとに盛大に開催されますこと、心よりお慶びを申し上げます。私も、皆様とこうして元気に再会できますことを大変嬉しく存じます。

今年は、3月11日の東日本大震災をはじめ、翌12日の長野県北部を震源とする地震、そして、新潟・福島の豪雨・台風12号及び15号など、「未曾有」「想定外」「百年に一度」などと形容される大震災が日本各地で発生しております。幸いにも小諸市は大きな被害もなく過ごしておりますが、多くの被災された皆様には、心からお見舞を申し上げますとともに、一日も早い復興を祈るばかりであります。

当小諸市におきましては、昨年もお伝えいたしましたが、市の将来をも左右する、いくつかの大きな課題に直面しております。これらの課題に対し、私は、「小諸市の興廃はこの一年にあり」との思いで、任期二期目の最終年度をまさに全力で全うすべく取り組んでいるところであります。

一番の課題は、何と申しましても「災害時に司令塔となる堅牢な市庁舎」と「二次救急医療を担い安全・安心の拠点となる小諸厚生総合病院」の再構築であります。この問題は、平成21年3月に市庁舎と小諸厚生総合病院との交換移転を提案して以来、二年半にわたる市民の皆様との話し合いや市議会での議論を踏まえるとともに、東日本大震災などの新たな状況の変化を考慮し、慎重に検討を重ねる中から、「現市役所敷地での市庁舎と小諸厚生総合病院の併設による再構築」という姿に帰着いたしました。先の九月定例市議会では、新庁舎整備関連予算が最終的に可決になり、去る十月五日には、長野県厚生連及び小諸厚生総合病院と再構築に関する覚書を締結したところであります。早期の事業成就に向け、今後も引き続き全力で対応してまいりたいと考えております。

また、「図書館を中心とする駅舎併設複合交流センター」につきましては、私のかねてからの夢であり、マニフェストにも掲げた事業でございましたが、昨年十一月、諸般の事情から整備延期を表明するに至り、現在は、駅舎併設に限定せず、中心市街地における整備について総合的に検討を行っているところであります。

最も日常生活に密着したものの一つである「新ごみ焼却施設」につきましては、建設現場を公募により菱野地区に決定し、地元の皆様の大変なご理解とご協力を得て、

極めて順調に事業が進捗しております。県内にも地元の理解が得られず、計画が思うように進まない事例が多い中、当小諸市の場合は、反対もなく、本当に有難いことと思っております。施設は、平成27年度当初からの本格稼働をめざしております。

さて、3月11日の東日本大震災では、大変多くの方々が被災し、多くの尊い命が失われました。私も、支援物資を携えて被災地へ赴き、現状を目の当たりにいたしましたが、自然への畏怖の念とともに、行政の責任の重さをあらためて痛感するなど、多くの教訓を得てまいりました。

その一つに「絆」があります。人と人との絆、地域と地域との絆、人と地域との絆。私たちは、小諸の地を離れながらも、小諸に思いを寄せてくださっている皆様との強い「絆」を感じつつ、小諸を誇りある故郷にするために、日々精一杯頑張っております。

皆様には、故郷小諸に対し、変わらぬご厚情を賜りますことをお願い申し上げますとともに、東京小諸会の今後益々のご発展、ご参会の皆様のご健勝、ご活躍を心からご祈念申し上げ、平成23年度総会・懇親会にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。

役員の改選

東京小諸会の役員は、本年末をもって任期満了となります。

これに伴い本総会で改選承認が必要となります。その候補者は次表の通りです。

東京小諸会役員候補者一覧
（平成二十三年十一月十九日　五十音順）

顧問	大西崇弘
	香坂勝
	芹澤勤
	別府福雄
会長	山岸喜昭
	小山洋之介
副会長	市川源太郎
	小山清吾
	高橋昭平
	田澤雄二郎
	土屋佳代子
	渡辺静雄
常務理事	飯高盛龍
	岩崎忠男
	岡部幸美
	北村尚巳
	小宮山栄
	白鳥ひさじ
	須田武久
	中村和巳
監事	八木澤弘志
	柳澤紀子
	掛川国雄
	鈴木裕子
	中村美子

坂の町小諸と小樽

東京小諸会　副会長　小山清吾

「小諸とは雨の涼しき坂の町」これは俳人富安風生さんが大正八年初めて小諸を訪れた時の句である。高浜虚子先生の高弟であり先生の最も厚い信頼を受けておられた方だけあって、この一句で小諸の印象が余す所なく表現されている。

小諸は北に浅間山を背にし、一番低い所を流れる千曲川までの急な傾斜地に拓けた町だけに、東西の道は左程でもないが南北の道は全て急坂である。荒町の角から赤坂といわれる通りを眺めると一番下に見える信越線の線路迄約500米位の長くて急な坂道は正に〝坂の町〟であることを実感させられる。私の生家の与良町から小諸駅まで行くのに〝行きは良い良い帰りは恐い〟の諺の様に帰りの上り坂は倍以上の時間がかかる程の急坂である。

坂の町は平地の町に比べ情緒や風情があって良いなどといわれるが、歩き廻ることによって足腰が強くなることの外に余り利点はない様に思う。

現に坂の多い所では経済活動においても不利な点が多い。下水道の設備に付いても大雨を予測して平地に比べ相当費用がかかると聞いている。又ある大型スーパーの社長さんと話した時「小諸には店を出せない。傾斜が急なため、1000坪土地を買っても上の方を削り、下の方をかさ上げすると800坪位いしか使えない。従って平地に比べ用地取得に3割以上金が掛かる」と言われた。現にこの会社は長野新幹線佐久平駅前に大きなホームセンターを出している。

私が旦て学生生活を送った北海道小樽も小諸と同じ様に山を背にして港まで急坂の多い街である。駅から天狗山という山の中腹にある学校まで約1500米程の長い急な坂道を登らなければならず、この坂を毎日登り下りする学生は「地獄坂」と言って、夏の間はともかく、積雪の多い冬場は正に地獄の坂道であった。小樽も戦前迄は北洋貿易の一大拠点として栄え、日銀の支店や三井物産、三菱商事の支店などもあり活況を呈していたが戦後は平地の拡がる札幌にその地位を奪われてしまっている。

大正十年代小樽高商に学ばれた虚子先生のご長男で俳人の高浜年尾さんも「遠き家の氷柱落ちたる光あり」の佳句を残されている。急坂の多い小樽の街である故高い所にある遠き家の水柱が落ちた光が見えたと読まれている。戦前の暖房は各戸で石炭ストーブを焚いていたので外に突き出た煙突の所に長さ一米直径20～30糎もある太い氷柱が下り、それが気温の変化により大きな音をたてて落下する時の情景を詠じたものである。

閑話休題

日本史と癌

日本外科学会名誉会員
東京小諸会副会長
掛川　暉夫

日本史上に現れた著名人で癌死した人々の病歴及び終末期の状況等について文献的に検索する機会があった。今回その中から特に興味ある事項を紙面の許す範囲で取り上げ述べて見たい。併し私自身歴史学者でもなく、古文に対する素養も無いので文献的渉猟の結果に対する解釈に独断と偏見の謗り及び誤謬のあることと十分承知の上で筆を取ったこと御理解の上御笑覧下されば幸甚に存ずる次第である。

一、「癌」文字の由来

癌と云う字が使われるようになったのは、今から約三百年前からであるが、今日のように不治の病の筆頭として病名、死因に使われたのは明治以後であり、江戸時代以前では死因として癌死と云う言葉が用いられたことは無かった。歴史的に見ると癌と云う字が日本の医学書に出て来たのは、貞享三年（1686年）に刊行された蘆川桂州著による医学辞書「病名革解」の中で紹介されたのが初めてではないかと云はれている。そこに書かれている一部を紹介すると、癰疽（質の悪いおでき）と一緒のカテゴリーに入れ、初め紫黒色で固い塊が次第に崩れ、潰瘍を作り深く食い込み岩のようになった状態を癌と稱するとしている。岩は「いわお」とも読み、厳の略字に嵒、嵒があるが、病気で岩の様になったから疒を付け癌と名付けたと述べている。多分乳癌を念頭に置いて使われたと思われるが、その他にも視診（目で見て診察する）出来る身体の表面に同様な塊が出来、岩のようになったもの、例えば皮膚、陰茎等に出来た場合、皮膚癌、陰茎癌と稱したようである。しかし乳癌手術で有名な華岡青洲（1760～1835年）の乳癌の手術記録を見ても「乳岩治験録」または「乳厳治療録」と両方の記載があるように確かに徳川時代末期には、既に「がん」と云う言葉が使用されて居たがあくまで外観から見て形態を記述したに過ぎなかったので記載した人の感じで表現が異なっていた。例えば乳癌に対し乳岩、乳厳、乳癌等統一性なく用いられていた。このことは現代のようにその塊が増殖、増大し周囲に浸潤、転移する極めて悪性度の高い、不治の病態を持つ所謂「おでき」等とは全く異なった独立した病気であると云う認識がなくあくまで癰、疽と同じ病気とし、唯形態を見て書いた結果だからと思う。

明治に入り西洋医学の導入と同時に極めて深刻な病態を示す独立した病気として癌と云う字に統一され病名となった。また人体の表面だけでなく、食道、胃、肝臓、子宮など内臓にも出来ることが分かり、これが原因で死亡した場合に癌死と云う言葉が使われ現在に至っている。

二、病名、病状の経緯

前述した如く江戸時代以前は癌が悪性度の極めて高い独立した病気であるとの概念は無かったが、現在の癌を想像する症状（当時は証とも云はれた）の記載はあり、これらの所見から当時も癌に罹患していた人が多く居たのではないかと類推することが出来る。夫れでは癌と思われる症状（証）を当時はどのような言葉で表現したかと云うと、主に積聚と噎隔と云う熟語で表した。積聚は触診で塊が触れる現象を云い更に積聚を分け積は腹部に出来た塊（腫瘍を）指し痛みが常にその場所に留まって居り、聚は腸内のガスが停滞、塊と感じる状態を云い時には移動することもあり、従って聚は必ずしも癌の存在を示唆するとは限らないとしている。積聚と同じような症状を示す場合に痞塊、癥瘕と云う言葉を用いたとの記載もあるが、これら全て腹部に塊（腫瘍）があり消化器系の閉塞症状を示す症状（証）で、現在の胃癌、腸癌、肝臓癌等のことを指した可能性が高いと推察される。噎膈（いっかく）については、噎は「食胸（食道）の上、咽（咽頭）の奥で食物、水分等がつかえて下がらず、むせび、吐く状態を云えり、膈（かく）は食胸の下でつかえ吐くくことを云えり」と記されているので、噎は主として食道癌を膈は胃癌を指しているものと思われるが、いづれにしても噎膈の証ありとは食道癌又は胃癌等上部消化管の腫瘍の存在を意味するものと考えられる。

三、治療法について

夫れでは前述の如き症状を示したものにどのような

治療が行はれていたか簡単に述べる。一般的には為す術が無く全身衰弱を補うための栄養剤の投与や症状の緩和治療が行われたに過ぎなかった。

例えば「噎膈」の治療法としては

(1)水と共に大匙一杯の塩を服用させる。

(2)美酒又は酢を口に含ませのませる。

(3)蘇（牛乳の上に出来る薄膜を集めたもの、チーズの一種）と蜂蜜を合わせ煎じ飲ませる。

(4)韮汁を取り服用させる。

(5)みぞおち、第5椎、踝の上等に灸をする。

(6)半夏（からすびしゃく）（里芋の一種）、桂心（シナモン）、生薑（しょうが）を水に混じ煮て服用させる。

(7)杏仁、桂心を丸薬にして食前に含ませる。

等の対症療法が行はれたことが記載されている。このような状況下で華岡青洲が1804年に薬物に依る全身麻酔下に乳癌を切除する積極的治療を行った事は特記すべき快挙であった。以上日本史上で見られた癌に関する知見について簡単に述べたが、最後に歴代の権力者、有名人で癌死したと思はれる人物について臨終の様子を含め述べる。唯し紙面に限りがあるので一般的に馴染み深い戦国時代に絞り紹介する。

◎**武田信玄**（1521—1573）53歳で死亡。死因、労咳説、地方病説（日本住血吸虫病）、鉄砲傷説があるが、甲陽軍艦に隔の煩とあること、信玄の侍医、御宿監物の書状に肺、肝に苦しむ（心身を労しての意）により病患忽ち腹心に萌しとあることより胃癌あるいは食道癌が死因と思われる。

「辞世の句：明日はその方が武田菱の旗を瀬田に立て候え」武将山県昌景に云ったと言う。

◎**上杉謙信**（1530—1578）49歳で死亡。死因、不慮の虫気とあるのを中気と誤り脳卒中説とするものがあるが、虫気は「ムシケ」と読むべきで、腹痛時にみぞおちの部分の鈍痛を云う。突然の発病ではなく、6～7か月前より衰弱、やせの兆候あり、次いで3か月前頃より鉄丸の如しと表現された腫瘤が心萬部に触れ、同時に食事が入らず吐逆する等狭窄症状から食道癌又は噴門癌と診断することが妥当と思う。

◎**毛利元就**（1497—1571）75歳で死亡。死因は、毛利家の記録「陰徳記」に「元就朝臣　膈の萌、種々医療の術尽し給う」とある。食道癌か胃癌が考えられるが胃癌説が強い。元就の孫輝元も大腸癌あるいは直腸癌で死亡73歳（1553—1625）。

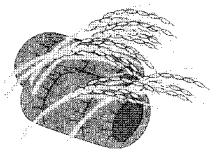
◎**徳川家康**（1542—1616）75歳。侍医片山宗哲が服に積（シャク）（集まりかさなる、たまる）と述べている。鯛の天ぷらを食べ過ぎ腹痛、吐瀉、咳漱等が衰弱を促進、死期を早めたが死因は胃癌。

「辞世の句：我この剣をもって、ながく子孫を鎮護すべし」と愛刀「三池典太（ノリヒロ）」を2振り3振りしてから気合いをこめてこう叫んだと云う。

◎**伊達政宗**（1567—1636）70歳。初め通過障害を訴え3～4か月後疲労倦怠衰弱顕著となり5か月後より腹水著明。症状出現より6か月で死亡。原発巣が食道癌（噴門癌）で腹膜に転移、癌性腹膜炎で死亡、江戸城に登城し家光に拝謁した後江戸屋敷で生涯を閉じる。

「辞世の句：雲なき心の月を先だって浮世の闇を照らしてぞ行く（澄んだ心で満足しながら死んで行く）」

◎**黒田長政**（1568—1623）55歳。黒田如水（1546—1604）（死因梅毒）の長男膈噎（カクイツ）で死亡と記述されているので胃癌または噴門癌。元家臣であった大阪の医師古林見宜が診察、本人に直接必死の病気覚悟めされと云ったら正直に言ってくれ感じ入ったと述べたと云う（インフォームドコンセントの始まりか？）

◎**丹羽長秀**（1535—1585）51歳。秀吉の専横を憎んで自殺したという説があるが、これは徳川幕府に嗣子を送り込むための創作の疑いが濃い。腹部の腫瘤を近臣に触らせた記録があり、胃癌が死因と考えられる。

以上「日本史と癌」と題し、国是として西洋医学を導入した明治以前の癌に対する知見及び日本史上で活躍した人物で、癌死したと思われる人たちの中から戦国時代に絞り臨終状況及び死因を紹介した。勿論独断と偏見にみちた解釈下での記述であるので多少の誤りがあり得ること再度御容赦願い筆を置く。